

---

# 冬が終わり春が来た

クラッキー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冬が終わり春が来た

### 【Nコード】

N5678P

### 【作者名】

クラッキー

### 【あらすじ】

あれから五年が過ぎたが、倉田夏海は、結婚どころか恋人もいないまま、干物女と化し始めていた。そんなある日、後輩の松井佳奈子から、一人の男性を紹介される。自分と同じ匂いを感じ、その彼に親近感を覚える夏海だが…。

『ハル、ナツ、アキ、フユ』の続編です。

## 寒い冬の日

いつもより遅く起きた日曜日の朝、遅めの朝食を食べていた私。

「あんだ、今日は家にいるの？」

母が聞いてきた。

「午後から、千絵と詩織で遊びに行くけど。何で？」

「一緒に出掛けるのは、彼氏じゃないの？」

「うん、違うよ。彼氏はいないもん。」

「はあ……。春海は、今のあなたの歳の頃には、結婚して子供だったのよ！千絵ちゃんと詩織ちゃんだって、結婚してるんでしょ？」

2

既に嫁に行き、家を出た姉や友人達と比較して、溜息をつく母。

「そうだけど……。お姉ちゃん達と、私は違うの！」

私も、行き遅れを心配されるような年齢になってしまったのだろうか？

「誰か、いい人はいないの？」

「うーん、今のところいないなあ。」

「そんなに、のんびり構えていられる歳じゃないでしょ！より好み

し過ぎてるんじゃないの？」

「別に、より好みなんてしてないよ。いい人は、中々見つからないものなんだよ。」

「とにかく、私は夏海が恋人を連れて来るのを待ってるの！せめて、三十歳までには結婚してよ！」

「そのうち連れて来るから大丈夫だよ。」

特に、アテなどないのだが…。

「『そのうち』って…。子供の頃は、夏海より春海の方が心配だったのに…。どうして、こうなっちゃったのかしら？」

あれから、もう五年が過ぎた。

既に、アイツの事は引きずっていない。

しかし、私に、春がやって来る気配は全くない。

原因は、何となく分かってはいるが…。

二十八歳になってしまった私だが、一向に訪れる気配のない春を、特に気にしてはいない。

「うー、寒い！コタツでミカンでも食べるか。」

『このままでいいのか?』と、思わないでもないが…。

その日の午後。

千絵達と待ち合わせをしていた駅前のカフェに、一足先に着いた私。少しだけ昔を思い出しながら、彼女達が来るのを待っていた。

「おーす、夏海！元気だった?」

相変わらず、テンションの高い千絵が、まずやって来た。

「とりあえず、体だけは元気だよ。」

「詩織はまだ?」

「もうすぐ来るんじゃない?」

「夏海、彼氏は出来た?」

「それが、まだ…。」

「より好みし過ぎなんじゃないの?誰かと比べちゃうとか。」

「そんなつもりは、全くないんだけど…。それより、出会いが全くない事の方が、私的には問題だと思うんだけど…。」

「夏海の会社って、女性が多いんだっけ？」

「そうなんだよ。だからね…。」

「でも、彼氏がいる子もいるでしょ？そういう子達に、誰か紹介して貰えば？」

「まあ、そうなんだけど…。それより、千絵の結婚生活はどうよ？」

話題を変えようとした私。

二年前に、千絵は結婚している。

前に彼女と会った時は、散々ノロケられて、閉口した。

「まだまだラブラブだよ！結婚はいいよー！」

「ああそう…。」

聞くんじゃないかった…。

「ごめん、遅くなっちゃって！出掛けに子供がグズっちゃったの。」

千絵のノロケ話にうんざりし始めた頃、遅れて詩織が来た。

ん？もしかして…。

「詩織もすっかりお母さんですなあ。」

おどけてみせる千絵。

『お母さん』と言われたのが恥ずかしかったのか、詩織は少し顔を赤くする。

詩織は大学卒業後、すぐに結婚した。

彼女の息子は、確か三歳になったところだったか？

久し振りに詩織に会ったが、私は彼女の体型の変化が気になって…。

「詩織、もしかして…、妊娠してる？お腹がふっくらしてるような…。」

「さすが、夏海ちゃん！気付くのが早いね。今、五ヶ月目なの。」

「…。」

詩織が、『お母さん』って事も、まだピンとこないのに、二人目とは…。

久し振りに会った私の親友達。

学生時代と変わりが無いところを残しつつ、彼女達は大きく変化を

している。

あの日、前に進もうと決意したはずの私だけは、何の変化もなく、ただ年齢だけを重ねていた。

「夏海ちゃんは、結婚しないの？」

「結婚どころか、彼氏すらいなくて…。」

「詩織も、夏海に何か言っていてやってよ！この娘ったら、昔と少しも変わってないんだから！」

「夏海ちゃんは、理想が高過ぎるとか？」

詩織まで、千絵や母と同じような事を言う。

私は、特に理想が高いわけでも、誰かと比べてしまっわけでもない。

どうやってたら彼氏が出るか、よく分からないんだよ、これが…。

親友達と別れ、家にかえると…。

「おかえり、夏海！デートだったの？」



姉の春海がいた。

「違うよ！友達と会ってたの。お姉ちゃん、一人？」

「旦那と娘は、隣の家にいるよ。」

「いいの？ほつといても。」

「平気、平気！お義父さんが面倒見てくれるから。今、うちのお父さんも、早く孫に会いたい一心で、隣に行ったところ。あの人は、孫の面倒を見るのが生き甲斐だから。」

「『母親』つて、そんな適当でいいのかなあ…。」

「失礼ね！いつもは、ちゃんとやってるよ！もうすぐお父さんが帰って来ると思うけど、そうしたら、宴会が始まるんじゃない？」

「またー？お姉ちゃん達が実家に来る度に、いつもそうなるじゃん！」

「別にいいじゃん。」

「…。秋姉ちゃんは？」

「来てないよ。そう簡単に帰って来れる場所に、住んでないからね。」

「確かに…。」

「夏海は、まだ彼氏がないの？」

「いません！」

「理想が高過ぎるんじゃないの？」

「…！だから、そんな事ないって！」

「何を怒ってるのよ。」

「別に怒ってません！」

今日は一体、何なの？

会う人みんな、同じ事を言うんだから…。

「こんばんは！」

「おーい、母さん！マサ達も来たぞ！」

お姉ちゃんの前想通り、お父さんが、隣に住んでいるお姉ちゃんの義父と、その息子、孫を連れて帰って来た。

「久しぶりだね、冬樹！」

「何だ、夏海。お前、まだ実家にいるのかよ。結婚しないのか？」

「うるさい！余計なお世話！」

「そんなに怒る事ないだろ。その歳で、ヒステリーはみっともないぞ。」

「…！コ・ロ・ス…。」

## 恋人の作り方

「あつ、夏海さん!」

「ああ、佳奈ちゃんか。」

月曜日の昼、食事に行こうとしていた私は、後輩の松井佳奈子に声を掛けられた。

「今から、お昼休憩ですか?」

「そうだよ。」

「私もです。何処に食べに行くんですか?」

「面倒臭いから、社員食堂へ行こうかと。」

「私もそうしようかな。ご一緒しても、いいですか?」

「勿論、いいよ!」

彼女は、今年で入社二年目。

背の低い、可愛い女の子。

彼女が新人の頃、とある飲み会で一緒になって以来、私に懐いてくれている。

会社の部署は違うが、私はこの人懐っこい後輩を可愛がっている。

「仕事は結婚したら辞めますよ。」

そう公言してはばからない彼女。

しかし、仕事は真面目にしており、能力もある。

それに、上司や同僚の受けもいらしい。

だから、結婚したら会社を辞めてしまうのは勿体ないと、私は思っている。

「佳奈ちゃんは、彼氏いるんだっけ？」

「いますよ。実は、同棲しようかという話もしてて。」

「結婚するの？」

「多分、このまま何も起こらなければ、結婚って事になると思いますが。」

今まで佳奈ちゃんとは、こつこつ話をした事がなかった。

私が、こつこつ話にならないように、何となく避けていたというのがもある。

昨日、散々、結婚を急かされてしまい、今日はこんな話をしてしまった。

「夏海さんは、結婚しないんですか？『仕事が命』とかですか？」  
当然、そう聞かれる事は予想していた。

昨日の事もあり、感覚が少し麻痺していたのかも知れない。

「『仕事が命』ってわけじゃないけど…。相手もないし、結婚なんてまだ考えられないかな…。」

「彼氏いないんですか！意外です！夏海さん、綺麗な人だから、当然、そういう人がいると思ってました。」

「ところが、全くモテないんだよ…。」

「何ですか、それ。イヤミですか？」

「そういうわけじゃないよ！結構、切実な悩みなんだけど…。」

「…？」「…？」

「彼氏って、どうやってたら出来るの？」

「はあ？今までの彼氏は、どうやって知り合っただんですか？」

「それが…、実は…、あんまり大きな声じゃ言えないんだけど…。彼氏がいた事がなくて…。」

「えっ…。冗談…ですよね？」

「ううん…。ホント…。」

「えー！」

「ちょ、声が大きい！」

「すみません…。理由…。聞いてもいいですか？」

「うん…。」

「男嫌いとか、男性恐怖症とかですか？」

「そういうわけじゃない…と思う…。」

「…。何か根が深い所に、原因がありそうですね…。」

「…。」

佳奈ちゃんは、そのまま考え込んでしまう。

「夏海さん、今夜、時間ありますか？」

「特に予定はないけど？」

「夏海さんに彼氏が出来ない原因を、二人で徹底究明しましょう！」

少しテンションが高くなった佳奈ちゃん。

「別にいいけど…。佳奈ちゃん、面白がってない？」

「ま、まさか！」

「…。」

私みたいな女は珍しいだろうから、気持ちは分からないでもないけど…。

「夏海さんみたいな人でも、彼氏が出来ない事ってあるんですね…。あつ！もしかして、夏海さん…。いえ、何でもないです…。」

佳奈ちゃんが何を言おうとしたか、私は分かってしまった。

彼女の想像は、間違っていない…。

その日の夜。

「今まで、男の人と知り合う機会とか、全くなかったんですか？」

「全くないって事もないけど…。高校、大学と女子校だったから…。」

「



これは、私の言い訳に過ぎない。

千絵や詩織は、大学生の時には彼氏がいたから。

「うちの会社も、男の人は少ないですから、出会いがないのは確かですけど…。」

「他の人達は、どうやって恋人と知り合うの？」

「それは、学生時代に見つけるとか…。」

「私は女子校だったからね…。」

「合コンで知り合うとか…。」

「合コンは元々好きじゃないし、トラウマ的なものもあって…。」

「うちの会社は確かに少ないですけど、独身の男性社員に声を掛けるとか…。」

「私みたいな年齢の女が、若い娘と張り合うのは、少しみっともなくない？」

「友達や知り合いに紹介して貰うとか…。」

「友達はみんな結婚しちゃってるからなあ…。」

「あの一、夏海さん！」

佳奈ちゃんの顔色が少し変わった。

「な…に?」

恐る恐る、彼女の様子を伺う。

「本気で彼氏が欲しいと思ってます?」

「…。」

痛いところを突かれた…。

今までは、いつか出来るだろうと、気楽に考えていたのは事実。

そう思っている内に、三十歳の足音が聞こえて来てしまった。

「本人が、彼氏が欲しいと思ってなければ、出来るわけがないじゃないですか!」

「…。」

年下の彼女に説教され、返す言葉もない。

「まずは、彼氏が欲しいと思うところから始めないと駄目ですね、夏海さんの場合。」

「最近、少し思ってるよ…。結婚した人達を見ると、みんな幸せそうだし…。」

「あとは、些細な出会いを大切にすることですね。」

「『些細な出会い』って？」

「例えば、友達の友達とか、ちょっとした知り合いとか、会話をする人とかの事です。男女問わず。」

「男女問わず？」

「そういった些細な繋がりから、運命の相手にたどり着く事もあるはずなんです。」

「運命の相手に繋がる…、か…。」

私には、繋がってると思っていた赤い糸が、途中で切れていたという経験があるが…。

「うーん…、この際、アイツでもいいか…。」

「…？」

何事か呟いた佳奈ちゃん。

「夏海さん、金曜日の夜、予定ありますか？」

「…？いつも夜は暇だけど、何で？」

「私…、夏海さんに、一人だけ紹介出来る奴がいるんですけど…。」

「えっ…。」

「顔の造りはそんなに悪くないと思うんですが…、何だかパツとしない奴で…。」

「ちょっと待って！急に言われても、心の準備が…。」

「だから、些細な出会いを大事にしましょうよ。そいつと付き合えって、言ってるわけじゃないんですから。」

「…。」

「ちょっと待ってて下さいね。」

そう言った佳奈ちゃんは、携帯を取出し、どこかへ掛け始める。

「もしもし、春人？彼女、出来た？」

「……………」

「じゃあ、金曜の夜は、勿論、暇だよな？」

「……………」

『あなたの用事なんて、大した事じゃないんだから、後にしなさいよー！』

『……………』

『いいのかなあ、そんな事、言つて。あんたに勿体ないような、綺麗な人を紹介出来るんだけどなあ。』

『……………。』

『そんな風に強がっていると、一生、独身だよ！』

『……………！』

『とにかく、騙されたと思って、私の厚意を受けておきなさいよ！絶対、後悔しないから。』

『……………！……………。…？』

『後から連絡する。絶対、バックレないですよ！そんな事したら、殺すからね！』

『……………！』

『社会的に抹殺するって意味よ！』

『……………！……………！』

『そつだよ！最初から素直に言えばいいのに。』

『……………！』

『私はいつでも素直ですー！』

『……………』

『うん、またね！場所が決まったら連絡する。だから、首を長くして待っててね！』

『……………！』

「…。」

「まったく、素直じゃないんだから。」

「仲がいいんだね…、その彼と…。」

「小さい頃からの、腐れ縁ってやつです。」

「幼なじみなの？」

「まあ、そんなところです。」

「佳奈ちゃん達は、お互いの事が好きだったりしないの？」

「まさかー！そんなわけないじゃないですか！幼なじみが恋人になるなんて、都市伝説か何かですよ。」

「『都市伝説』って…。」

うちのお姉ちゃんは、幼なじみと結婚したんだけど…。

「あんまり期待しないで下さいね。本当にパツとしない奴ですから。」

「ハハハ…。」

酷い言われようだな、その彼も…。

「金曜日の夜ですから、忘れないで下さいよ。まさか、夏海さんがバツクレたりする事はないですよね？」

「大丈夫…です…。」

成り行き上、おかしい事になってしまった。

私は、妙な胸騒ぎがして仕方がなかった。

佳奈ちゃんとその彼が、幼なじみだという事に…。

## 決戦は金曜日

金曜日になると、私は朝から憂鬱だった。

例の彼と会いたくないという事では、決してないが…。

そんな日に限り、残業もなく、定時に仕事は終わってしまっ…。

「夏海さん!」

「…。」

「夏海さんってば!」

「あっ、何?」

緊張している私。

いい年して情けない…。

「もしかして…、緊張してるんですか?」

「…!少し…。」

「夏海さんって可愛いですね!最近、夏海さんの印象が、だいぶ変わりましたよ!もっとカッコいい女性だと思ってました!」



「…。」

ホント、情けない…。

「それにしても、アイツ遅いなあ。もしかして、またバックレたか？」

「『また』って、前もあつたの？」

「そうなんですよ！大学生の時、今の私の彼氏と三人で会う約束をした事があつて。その時、春人の奴、『急にバイトが入った』とか言つて、来なかつた事があるんです！」

「へーえ…。」

私の予感は、どうやら当たりの気配がする。

「その時、春人に女の子を紹介してあげようと思つて、アイツに内緒で、私の友達も呼んでたんです！」

「…。」

別に、内緒にする必要はなかつたのでは？

「さすがに、彼氏と三人は、春人も居心地が悪いだらうと思つて気を使つたのに。その後、色々フォロワーするの大変だつたんですから！」

「…。」

「初めて、アイツに殺意を覚えましたよ！春人を、社会的に抹殺出来るような、奴の恥ずかしい過去を、私は知ってますから。」

「私は、その彼が来なかった理由…、何となく分かるかなあ…。」

「夏海さんは、春人の肩を持つんですか？」

「そういうわけじゃないけど…。」

見たくなかったんだよ、きつと…。」

私の予想通りなら…。」

私の場合に置き換えると…。」

間違いなく逃げるね…、私も…。」

実際、似たような事をした記憶もあるし…。」

「それにしても遅いなあ、春人の奴！電話してみようかな？」

佳奈ちゃんが携帯を取り出そうとした時、私達の方に歩いて来る男性を見つけた。

私達の方を見ながら歩いて来る、その男の人。

正確に言えば、佳奈ちゃんの方を見ている。

恐らく、彼の目に、私は映っていない…。」

「おい、佳奈子！」

佳奈ちゃんに呼び掛ける、その男の人。

「…！遅い、春人！女性を寒空の中、待たせるなんて最低！」

「相変わらず自分勝手な女だな！無理やり呼んだのはお前だろ！こつちだつて、『仕事の都合』つてのもあるんだから。」

「そうだとっても、急いで来なさいよ！全力で走って来るとか。」

「何でお前の為に、全力疾走しなきゃいけないんだよ！」

「今日は、私だけじゃなくて、あんたに紹介したい人がいるつて言つたでしょ！そんな態度じゃ、出だしから減点だよ！ですよね、夏海さん？」

「そんな事もないけど…。」

掛け合い漫才のような二人のやり取りに、圧倒されていた私。

そして、佳奈ちゃんが私に話を振った時、彼はゆっくり私の方を見て…。

「…！」

大きく目を見開き、固まってしまった。

「…？」

「…。ちよっ、佳奈子！こっち来い！」

「何よ！」

「いいから、来いって！」

二人は、何やら話し始める。

何かあるのか？

私が、思っていたよりおばさんだったとか…。

まだ、二十代なんだけどなあ、一応…。

それとも、私の背が高過ぎるとか…。

でも、私ぐらいの身長なら、他にもいっぱいいるでしょ？

お姉ちゃんとか…。

「改めて紹介しますね。この垢抜けない男が、松浦春人。」

佳奈ちゃん達だけの会話が終わり、彼女がその彼を紹介する。

「一言多いんだよ！…初めまして…。」

「初めまして、佳奈ちゃんの同僚の倉田夏海です。」

私が自分の身長を気にしたのは、春人君の背が低いから。

佳奈ちゃんよりは大きいけど、多分、私より小さい気が…。

更に、かなり童顔である。

『高校生』と言われても、信じられるくらい…。

キリッとした顔付きは、想像とはだいぶ違うが、彼はそれなりにモテるんじゃないのか？

「寒いから、早く店に入りましょうよ！」

先に行く私達の後から、春人君はトボトボと付いて来る。

彼は、佳奈ちゃんが言うほど悪くないでしょ？

私は、自分の鼓動の早さを自覚していた。

「ねえ、佳奈ちゃん。さっき、二人で何を話してたの？」

「夏海さんが、心配してるような事じゃないと思いますよ、多分。」

「…？」

「夏海さんが美人過ぎて、アイツが舞い上がったただけですから。」

それにしても…。

私のこのドキドキは、初対面の緊張からか、それとも…。

この日、佳奈ちゃん達と話しているのは楽しかった。

佳奈ちゃんと春人君の掛け合いは、面白かった。

言いたい放題の佳奈ちゃんに、声を荒げるでもなく、冷静に突っ込む春人君。

同じ幼なじみでも、人それぞれ。

私達の場合は、こんな感じではなかった…。

そして、時々見せる、春人君の悲しげな表情が気になる。

やっぱり、春人君は佳奈ちゃんが好きなんだろうな…。

私の予感も、どうやら当たっていたようだった。

「それじゃあ、夏海さん。私はこっちの電車なんで。」

「うん。今日は楽しかった！また月曜日ね！」

駅の改札前で、佳奈ちゃんと別れる。

「ちよつと待てよ、佳奈子！俺もそつちなんだから。」

「はあ？何を言ってるの春人？」

「何がだよ！」

「あんたバカなの？春人は、夏海さんを送って行くに決まってるでしょ！」

「「えっ！」」

私と春人君がハモツてしまう。

「わ、私は大丈夫だよ！家は駅から近いし、駅からタクシー使つて帰るし。佳奈ちゃんの方こそ、一人じゃ危ないでしょ？」

「私は平気です！駅まで彼氏が迎えに来ますから。そのまま、彼氏の家に行きますし。」

「…。」

チラッと春人君を見ると、また悲しげな顔をしていた。

佳奈ちゃんも残酷だよなあ…。

「それじゃあ、春人。夏海さんをよろしく！」

そう言い残して、佳奈ちゃんは行ってしまった。

「仲がいいんだね…、佳奈ちゃん…」。

「そうですかねえ…。」

春人君と二人きりは、さすがに少し気まずい。

「春人君の恥ずかしい過去、いつばい知ってるみたい…だし…。」

「言われて困る事でもないですよ…。」

何とか話し掛けるも、会話が弾まない。

「…。」

「…。」

あつという間に、話のネタが尽き、沈黙の時間が訪れる。

恋愛初心者に近い私には、荷が重い状況だった。

そういえば、私の連絡先を、聞いてくれないのかなあ…。

それとも、年上の私が聞くべき？

こういう事は、男の人が聞いてくるものだよな？



そんな事が、頭の中を駆け巡っている内に、最寄り駅に着いてしまった。

「ここで大丈夫だから。駅前タクシー拾えるし。」

改札を出た所で、春人君に告げる。

「じゃあ、タクシー乗り場まで。」

黙って私の横を歩く彼。

やっぱり、私の方が少し背が高い…。

「今日はありがとう。楽しかった！また遊んでね！」

精一杯の笑顔を作る私。

「はい。」

私が小さく手を振ると、彼は優しく微笑んだ。

その笑顔に、私の鼓動は再び早くなる。

タクシーに乗り込み、すぐに振り返ると…。

既に、彼の姿はなかった…。

やっぱり、彼の目に、私は映っていない…。

「はあー…。」

大きく溜息をついた私。

溜息の理由は何だろう…。

そういえば、結局、連絡先を聞けなかった。

もう少し、彼と話がしたかったのになあ…。

彼に私と同じ匂いを感じ、妙な親近感を覚えた。

## 彼の連絡先

モヤモヤしたものを抱えながら過ごした週末。

そして、いつものように出勤した月曜日の朝。

「夏海さん、おはようございます!」

この声は…。

「佳奈ちゃんか。おはよう!」

出勤途中、佳奈ちゃんに声を掛けられる。

「はい、これ!」

「何、これ?」

彼女に紙切れを手渡される。

携帯電話の番号と、メールアドレスが書かれた紙。

「春人の連絡先です。もー、何やってるんですか、夏海さん! 連絡先ぐらい、自分で聞いて下さいよ!」

「春人君に聞かれなかったから…。」

私も聞かなかったが…。

「だったら、夏海さんが聞けば良かったじゃないですか！電話番号ぐらいで、何も変わったりはしないですから。夏海さんの連絡先も、教えていいですか？」

「いいけど…。」

「私が出るのは、ここまでですからね。後は、紙切れのように捨てるのも、大事に育てるのも、夏海さんの自由ですから。」

「うん。」

もう会えないかもと思っていた私は、何だか嬉しくなった。

紙切れ一枚で、私の運命が動き出すような気がして…。

その日の夜、春人君の連絡先を、携帯のメモリーに登録する。

そして…、かれこれ一時間…。

携帯電話と、にらめっこしたまま何も出来ない私…。

いきなり電話するのは、おかしくないのか？

色々誤解されるような事態にならないか？

もし、電話に出てくれなかったら、どうするの？

初めはメールの方がいいかな？

でも、何て送ればいいの？

やっぱり、日を改めた方が…。

イヤ、ダメだ！

そんな事したら、ますます連絡しにくくなる。

いい年して、さっきから何をやってるんだ、私は！

そんな無限ループを繰り返しながら、時間だけが過ぎて行く。

よし！

まずは、『一緒に食事でも』だ！

私は、彼ともう少し話がしたいだけなんだから！

『些細な出会い』を捨てるのも、育てるのも私の自由！

震える手で携帯を持ち、ふと時計を見ると、既に、二時間が経過していた。

その時…。

「わあー！」

突然、着信があり、慌てた私は、携帯電話を落としてしまう。

慌てて拾い上げ、誰からか確認すると、春人君からだった。

『もしもし、春人君？』

声が裏返った…。

『夏海さんですか？何か、声がおかしいですけど、大丈夫ですか？』

『だ、大丈夫！私も、電話しようと思ってたところだったの。』

かれこれ二時間も…。

『そうだったんですか。俺は、夏海さんの番号を聞いたんで、一度、連絡しておこうと思って。』

『そうだったの…。』

佳奈ちゃんに言われたんだな…、きっと…。

『何か元気ないですけど、本当に大丈夫ですか？』

『本当に大丈夫だから、気にしないで！』

『…。』

そこで、一言、返してくれると話が続くんだけどなあ…。

『また…、飲みに行こうよ…。』

自然に言えたよね？

『勿論、いいですよ！佳奈子も一緒ですか？』

『私と二人じゃ…ダメ？』

『いい…ですよ、二人でも…。』

『良かった…。私…、春人君と、少し話があったの。佳奈ちゃん抜きで…。』

こんな事、言っちゃって良かったかな…。

『どんな話ですか？』

『それは、電話じゃ…、ちょっと…。』

私の言い方は、誤解を与えなかっただろうか？

『何を言われるか、ちょっと怖いですけど…。』

『今週の金曜日の夜は、どうかなあ？』

さすがに、急過ぎかな？

『いいですよ。この前と同じ所でいいですか？あんまり、店とか知らないのです。』

『いいよ、あそこで。じゃあ、この前と同じ時間でいい？』

『大丈夫だと思いますけど…。少し遅れたら、すいません。』

『春人君も忙しいだろうから、気にしないでいいよ。』

『じゃあ、何かあったら連絡します。』

『うん。じゃあまた…。おやすみ。』

『おやすみなさい。』

緊張した…。

私、自然に出来たよね？

そして、金曜日の夜。

早く着き過ぎてしまった私は、先週と違うドキドキを抱えながら彼



を待つ。

春人君は、時間通りに来た。

しかも…。

「もしかして、走って来たの？」

息を切らして。

「今日は…、待たせちゃ…いけないと…思って…。」

呼吸が整っていない彼。

その姿を見て、胸がキューツとなる。

「別に良かったのに。私は気にしないから。」

「イヤ…、でも…。」

「取り敢えず、店、入ろうよ。」

並んで歩こうとした私は、自分の失敗に気付く。

今日、ヒールが高い靴、履いて来ちゃった…。

最初は、少しきこちない二人。

いつもより、お酒を飲むスピードが早くなってしまっ。

すると、酔いも手伝い、徐々に打ち解け始めた。

「春人君は、佳奈ちゃんが好きなんですよ？」

「えっ！」

思考回路が麻痺し始めていた私は、直球の質問をしてしまっ。

「凶星…かな？」

「夏海さんって…、鋭いですね…。」

「だてに、歳は取ってないからね。春人君の気持ちは…、伝えないの？」

「アイツ…、彼氏がいるし…。それに、俺はもうフラシてますから…。」

「…？告白した事あるの？」

「ええ…、まあ…。三回ほど…。」

「えー！」

三回って…。

「一回目は、幼稚園の時…。これは、よくある話です。『大きくなったら結婚しよう』って言ったら、『嫌だ』って言われました…。」

「…。」

佳奈ちゃんらしいと言うか…。

「二回目は小学六年の時…。『好きだ』と言ったら、『何の冗談？』と…。この時は、信じてもらえませんでした。」

「そこで、めげなかったんだ…。」

「はい…。佳奈子に、そういう対象に見られていない事は、何となく気付いてはいましたけど…。三回目は、中学の卒業式の日でした。」

「今度は、何て言われたの？」

「『本気で好きなんだ』と言ったら、『そういう対象で見れない』と、きっぱり言われました…。」

「…。」

彼は、私と全然違うじゃん…。

「高校は別々だったんで、しばらく会わなかったんですけど…。二十歳の時、家の近所で、偶然、再会したんです。」

「そこで、運命を感じちゃったとか…。」

「はい…。恥ずかしながら…。でも、もう彼氏がいて…。しかも、昔の俺の告白なんて、覚えてないような感じで…。」

「覚えてないって事はないと思うけど…。佳奈ちゃんとしては、春人君とずっと友達でいたい、という事じゃないかなあ…。」

「今は、いつか振り向いてくれるんじゃないかという、女々しい期待をしてる状態です…。」

二十年以上、何も行動しなかった私に比べれば、春人君は凄い…。

そして、強い…。

この日は、少し飲み過ぎた。

足元が、少しおぼつかない…。

「あっ！」

「おっと！大丈夫ですか、夏海さん？」

よろめいた私を、受け止める春人君。

そして、私の鼓動は急に早くなる。

「今日はここでいいから。春人君は反対方向だし。」

改札前で別れを告げる。

「ダメです、そんな状態じゃ。この前みたいに送ります。」

「申し訳ない…。」

結局、一緒の電車に乗る私達。

「今日のごめんね。醜態も晒してしまつて…。」

「大丈夫ですよ。楽しかったですから。」

「また遊んでくれる?」

「勿論です。夏海さんさえ良ければいつでも。」

タクシー乗り場で、春人君と別れる時、また小さく手を振る私。

彼も優しく微笑み、小さく手を振る。

タクシーに乗り込み、すぐに振り返ると…。

彼は、まだそこにいた。

嬉しくなった私は、もう一度、タクシーの中から手を振る。

それに気付いた彼も、手を振り返す。

さつきよりも大きく…。

角を曲がる直前に振り返ると、彼はまだ、私の乗ったタクシー見送

っていた。

彼の目に、私は映るようになっただろうか？

「彼氏ですか？」

タクシートのドライバーに声を掛けられた。

「いえ…、違うんですけど…」

まだ、彼氏ではない…。

しかし、彼の事が好きになってしまったのだと、自覚せざるを得なかった…。

## 芽吹き始める季節

あの日以来、春人君とは会っていないが、メールのやり取りをしている。

メールの返信の有無に、一喜一憂している私。

女子高生かよ…、私は…。

そんな自分の姿に、自分でツツコミを入れる。

その日も、昼食を取りながら、メールの文面を考えていると…。

「なーっーみーさん！」

「…！な、何？」

佳奈ちゃんに声を掛けられ、慌てて携帯を閉じる。

佳奈ちゃんは、いたずらっぽく笑みを浮かべている。

「例のものは、捨てました？それとも、育ててます？」

「一応、育ててる…。」

「ホントですか！もしかして、もう芽が出始めてたりして！」

「あっ、えっ、いつ、いつ…！」

「えっ、ウソー！」

佳奈ちゃん言葉に、思いっきり動揺してしまい、私の気持ちに気付かれる。

「夏海さん、あんなのでいいんですか！」

「…。」

『あんなの』と言われ、少しムツとしてしまう私。

「それで、これからどうするんですか？」

「どうしたらいい？」

恋心を自覚したはいいが、これから先の展開を、考えあぐねていた私。

「『どうしたらいい？』って…、子供じゃないんですから。ガンガン攻めるしかないですよ！大丈夫です、夏海さんの攻撃力なら、あつという間に落ちますから！」

「どんな攻撃が有効かな？」

「取り敢えず、二人で会うとか…。」

「それは、もうやった…。」

「いつの間に…。次は、定期的に会ったり、休日に二人で出掛けるとか…。」



「夜ならまだマシだけど、昼間は少し勇気がいるというか…。」  
休日に、男の人と二人で出掛けた経験はないし…。

「しょうがない人ですね…。それじゃあ、私達とWデートでもしますか？それなら大丈夫でしょ？」

「来てくれるかな…、春人君…。」

「もし断られたら、私がアイツを抹殺しますから大丈夫ですよ。その代わり、誘うのは自分でやって下さいよ。」

「分かった…。頑張る…。」

『それで、佳奈ちゃん達と遊びに行こうって話してて。』

その日の夜、再び、一時間ほどにらめっこをした後、春人君に電話で話してみる。

『うーん…。佳奈子の彼氏も一緒なのは…。』

やっぱり、そこが引つ掛かるよね…。

『やっぱり、ダメ？』

『ダメじゃないですけど…、まだ気持ちの整理が付けられていないので…。』

こうなったら…。

『じゃあ、私と二人でならどう？』

『えっ…。』

『それも、ダメ？』

『…。夏海さんは、俺と二人でもいいんですか？』

『勿論！』

『それなら…、いい…ですけど…。』

電話を切った後、小踊りして喜んでしまった…。

年甲斐もなく…。

当日の朝、気合いを入れて早起きした私。

「あんだ、何やってるの？こんなに朝早く。」

起きてきた母に、声を掛けられる。

「お弁当を…、作ってる…。」

「はあー？夏海が？作れるの？」

何て失礼な人だ！

「大丈夫だよ！お姉ちゃんより、私の方が料理は上手だし。それに、高校生の時、自分で作って行った事もあったでしょ？」

「確かにそうだけど…。もしかして…、デート？」

「…！」

ビクツとして、一瞬、手が止まる。

「ふーん、そういう事。」

意味深な含み笑いをする母。

まあ、普通、バレるよね…。

何とか形になったお弁当を携え、春人君と待ち合わせた場所に急ぐ。

この日、春人君は既に来ていた。

「ごめん、待った？」

「大丈夫ですよ！俺が早く着き過ぎただけですから。」

カップルみたいな挨拶を交わしてしまい、恥ずかしくなる。

それに、動き易いように、今日はスニーカーを履いて来たが、やっぱり春人君より、微妙に目線が高い…。

春の訪れを実感するほど暖かかったこの日、私達は遊園地に来た。

以前にも来た事がある場所だったが、私は子供のようにはしゃいでしまう。

そんな私の姿は、春人君に引かれたかも知れない…。

前に来た時は、全然、楽しくなかったのになあ…。

「あんまり、上手に出来なかったんだけど…。久し振りに作ったかしら…。」

「そんな事ないですよ！美味しいです！」

「良かった…。」

春人君にお弁当を見せると、目を丸くした彼。

そして、美味しそうに食べてくれる彼。

そんな彼の姿を見て、ガッツポーズをする…。

心の中で…。

「今日の事…、佳奈子には言ってるんですよね？」

「うん…。言わない方が良かったかな…？」

だって、彼女には説明しないとイケなかったし…。

「言わないわけには、いかないですもんね…。」

「春人君は、まだ佳奈ちゃんが好きなんだもんね…。」

「実は最近…、少し変わってきてるんですけど…。」

「えっ…、どっという事？」

春人君は、チラッと私を見た気がした。

「いえ…、別に…。」

少しは私の事を意識してると、解釈していいの？

「最後に、観覧車に乗ろうよ！」

「…いいですよ…。」

『観覧車』という言葉に、ビクツと反応した彼。

ちよつと様子がおかしかつたが…。

最後に観覧車に乗る事は、最初から決めていた。

一日中、一緒にいて…、お弁当に喜んでもらって…、仲良くなって…、あわよくば観覧車で…。

そんな、都合のいい事を考えていた私。

ところが…。

「もしかして…、体調でも悪いの？」

「そうじゃなくて…。えーと…、高い所は少し苦手で…。」

「えー！先に言ってよー！」

「夏海さんが、楽しみにしてるみたいだったから…。」

並んでいる最中から、少し顔が強ばっていた春人君。

観覧車に乗ってからは、顔色まで悪くなってきていた彼。

そんな事に気付かず、都合のいい事ばかり考えていた私…。

彼の優しさに、私の鼓動はまた早くなつたが、今はそれどころではない。

「どうしよう…」

「大丈夫です…。何か話していれば…」

何か話してと言われても…。

とても、『告白』という雰囲気ではないが…。

「私も…、春人君と同じような経験があるんだ…」

「夏海さんも、高所恐怖症だったんですか？」

「それじゃなくて。幼なじみが好きだった事がある…の…。」

「そうだったんですか…。」

「私の場合、自分の気持ちを伝える前に、その彼が、他の人と付き合い始めちゃって…。」

「…。」

「そいつに彼女が出来てから、しばらく会っていなかったんだけど

…。春人君みたいに、二十歳の時、再会したの…。」

「運命を感じたんですか？」

「ううん…。私の場合、そいつが彼女と別れていない事は、知ってたから…。」

「でも、まだ好きだったんですよね？」

「そうだけど…。友達みたいに戻ればいいかなと思って、自分の気持ちは隠してた…。」

「告白しなかったんですか？」

「好きだと言ったところで、何も変わらないと思ってたから…。そうこうしている内に、会う事もなくなっちゃったの…。」

「今からでも遅くないですよ！ちゃんと気持ちを伝えるべきです！」

「違うの、まだ続きがあつて…。その後、気持ちはちゃんと伝えた。」

「どうなつたんですか？」

「彼の結婚直前だったから、結局、何も変わらなかった。でも、私の気持ちに区切りはついて、前に進む気にはなれた。」

「…。」

「春人君も、自分なりに区切りをつけるべき時期なんじゃないかな



あ…。」

「もう一回、告れって事ですか？」

「そういう意味じゃなくて、他の娘に目を向けてみるとか…。」

例えば、私とか…。

「それが出来たら、苦労はしないですよ！」

「…！」

少し声を荒げた春人君。

私の余計な一言は、彼を怒らせてしまったかも知れない。

もう少し、私を見て欲しかっただけなのに…。

気が付くと、彼の顔色はだいぶ良くなっていた。

観覧車を降りた後、二人の間の空気は、少し重かった。

私は、その空気に負けないように、明るく振る舞ってみせる。

本当は、泣きたい気分だったが…。

春人君の中における私の存在は、佳奈ちゃん存在に比べて、あまりにも小さ過ぎる事に気付いてしまったから…。

「今日も送って行きましょうか？」

「今日はいいよ。まだ時間も早いし、シラフだから。」

「そうですか…。」

この日は、あっさり引き下がる春人君。

確かに、『今日はいいよ』とは言ったが…。

私の期待とは、違う言葉が返ってきて、再び涙が出そうになった。

「今日も、楽しかった！」

私は、出来るだけ明るい声を出した。

自分の気持ちを隠す術に関しては、誇れるレベルにあるね…、まったく…。

「俺は、醜態を晒してしまっ…。」

「そんな事、気にする必要ないって！誰にでも、苦手なものはあるんだから。」

「そうですけど…。」

「また…、遊んでね…。」

「…。はい…。」

その一瞬の間は、どういう意味…？

「それじゃあ、バイバイ！またね！」

頑張つて、笑顔で手を振る私。

「それじゃあ、また。」

春人君も、小さく手を振り返してくれたが…。

笑顔はなかった…。

「はあ…。」

大きく溜息をつき、気持ちを落ち着かせる。

涙が零れてこないように…。

「ただいま…。」

「デートはどうだったの!」

満面の笑顔で、私を迎える母。

「うん。。」

「…?もしかして…、フラレちゃったの?」

「違うよ!もー、うるさい!ほっといてよ!」

「おー、コワ。」

能天気な母親にイラつき、八つ当たりをしてみよう。

そして、自己嫌悪に陥る。

## 決戦は金曜日 その二

「デートはどうでしたか？」

出来るだけ、佳奈ちゃんには会わないようにしていた月曜日。

しかし、彼女に目ざとく見つけられてしまう。

「楽しかった…よ…。」

「そういう事じゃなくて。夏海さんには、デートの様子を、私に報告する義務があると思うんですけど。」

「大して進展はなかったけど…。」

「まあ、言いたくなければ、別にいいですけど。春人から少し聞き出したし。」

「えっ！どこまで？」

「『どこまで』って、夏海さんが、お弁当を作って行った事とか。これは、ポイント高いですよ！夏海さんも、やれば出来るじゃないですか！」

「友達の真似をしたただけなんだけど…。」

「あとは、春人を観覧車に連れて行っちゃった事とか。アイツ、昔から高い所が苦手で。子供の頃、観覧車に乗ったら、大泣きして大変だったんですから！」

「知らなかったから…。最初に言ってくれば、良かったのに…。」

「『今回は耐えられる気がした』って、言っていましたよ。春人の奴、夏海さんの事、結構、意識してると思いますよ！」

「そんな事ない、…よ。」

「帰り際、夏海さんの様子が、ちょっとおかしかったって、気にしてましたけど…。アイツ、夏海さんの気に障る事でもしました？」

「そういうわけじゃないよ…。彼が、ずっと好きだった人の事が忘れられないみたいで、悲しくなっただけ…。」

「アイツ、好きな人いたんだ。」

「そうみたい…。だから、彼の目に、私は映ってないと思う…。」

「それは違いますよ！だって春人に、夏海さんってどんな人なのか、細かく聞かれましたし。」

「…！」

「あっ、これは口止めされてたんだっ！ま、いつか。」

「何て答えたの？」

「外見とは違って、凄くピュアな人って言っとききました。繊細で可愛らしい人って。」

「…。」

「だから、あと一押しですよ！そうすれば、向こうから言ってくるよ。『夏海さんが好きだ』って。」

「本当に？」

「間違いないです！もう一つ、手っ取り早い方法もありますけど…。」

「手っ取り早い方法？」

「結構、簡単な事ですよ。夏海さんの方から、『好きだ』って言うだけですから。」

「…！全然、簡単じゃない！」

「だから、一つの手段であって、どうするか決めるのは夏海さんですから。長期戦を覚悟して、押しまくるのが、一言伝えて、短期決戦で終わらせるのか。」

「…。」

「夏海さんの場合、短期決戦でいっても、勝算は充分あると思いますけど。あくまで、私の個人的な意見ですから、責任は取れません。」

「私から気持ちを伝える…か…。」

「難易度が高いな…。」

いや、これからは素直に気持ちを伝えようと、あの日に誓ったじゃないか！

でも、いざとなると…。

そして、私は…。

またしても金曜日に、この前と同じ場所で、春人君と一緒にお酒を飲んでいる。

私はまだ、短期か長期か決めかねていたが、この日は春人君に誘われて飲みに来た。

春人君は、何か話があるに違いない。

「この前、夏海さんに言われた事を、ずっと考えていたんですけど…。」

「私、何を言っただけ？」

アルコールの所為か、自分の言っただ事が思い出せない。



「『自分なりの区切り』って奴です。」

「ああ、あれね…。私が、余計な事を言っただけだから、気にしなくても良かったのに。」

「俺の区切りの付け方って、どうする事なんでしょう？」

「それは、春人君しか分からない事じゃないかなあ。私に口出し出来る事じゃないよ。」

「でも、この前、『他の娘に目を向ける』って言ってたじゃないですか？それで、区切りを付けた事になるんでしょうか？」

「あれは、例えばの話であって…。」

「それじゃあ、他に何か方法はないですか？」

「だから…、私が口を出すべきじゃないって言うてるでしょ！」

「…！すいません…。」

思わず声を荒げてしまった。

「…。私の方こそ、ごめんなさい。大きな声を出して…。」

「いえ…。」

「さっきから、『区切り』って言うてるけど…。佳奈ちゃんの事は

もういいって事？」

しばしの沈黙の後、私の方から言葉を発する。

「勿論、もう好きじゃないという事ではないです。ただ、前に進まなければいけない理由が出来たので…。」

「『理由』って何？」

「それは…、まだ言えません…。」

春人君は、私の顔を見た。

しかし、私と目が合うと、すぐに伏せてしまう。

佳奈ちゃんが言うように、私を意識しているという事なのか？

私の心は、急激に『短期決戦』の方に針が振れる。

簡単な事だよ！

『好きだ』と伝えるだけなんだから！

素直に気持ちを伝えるだけなんだから！

言わずに後悔するより、言って後悔した方が、絶対いいに決まっている！

「何となく、気付いているかも知れないんだけど…。私ね…。」

「待って下さい！そこから先の言葉は…、待って下さい…。」

「えっ？」

「俺に少し時間を下さい。そこから先を聞く前に、『自分なりの区切り』を付けるので…。」

「…？」

「区切りが付いたら、改めて聞きます…。じゃなくて…、俺が…。」

「それって…。」

私は、期待して待っていていいの？

「今日も送って行きます。」

「ありがとうございます。」

この日も、わざわざ反対方向の電車に乗り、私を送ってくれる春人君。

「…。」

「…。」

並んで電車に座る二人の間に会話は無い。

一体、どういっつもりなんだろう、春人君は…。

期待してても、本当に大丈夫なの？

私はずっと、そんな事を考えていた。

「一週間…。」

「えっ？」

「俺に一週間、下さい。」

タクシー乗り場で、いつものように別れを告げた私に、春人君が言った。

「…。」

「一週間後の金曜日に、また会って下さい。」

「…。分かった…。」

「じゃあ、気を付けて。」

「うん…。ありがとう…。」

この日は、タクシーの中で振り返らなかった。

振り返るのは、怖かった…。

## 開花宣言

それから一週間、私は生きた心地がしなかった。

仕事でミスを連発し、みんなにも迷惑を掛けてしまう。

そんな私は、怒られるどころか、逆に心配されてしまった。

日頃から、真面目に仕事しといて良かった…。

つくづく、そう思った。

佳奈ちゃんにも会わずに済み、定期報告をする必要もなかった。

そして、運命の金曜日。

前日、私の街にも、桜が咲いたというニュースが流れていた。

この日は、月曜日からミスを連発してしまった所為で、定時に仕事が終わらない。

春人君との約束の時間にも間に合わない。

少し遅れる旨をメールで告げ、急いで仕事を片付け、春人君の待つ

場所へ走る。

「ごめん…、遅く…なつて…。」

息を切らせて、待ち合わせ場所に着く。

「走つて来たんですか？」

「遅れ…ちゃつた…から…。」

「別に良かったのに。俺は気にしないですから。」

「でも…。」

いつかと同じ会話をする私達。

立場を入れ替えて…。

この日の春人君は、心なしか、すっきりした顔をしていた。

彼の笑顔に、私の期待は大きく膨らんだ。

「一昨日、佳奈子の彼氏に会って来ました。佳奈子と三人で。」

「はあー?」

春人君の報告に驚きを隠せない。

「何か、凄くいい人でしたよ。」

「そ、そう…。」

「多分、佳奈子の彼氏には、俺の佳奈子に対する気持ちを、見透かされていたかも知れませんが。」

「大丈夫だったの？」

「表面上だけかも知れないですけど、嫌な顔、一つせず、俺とも気さくに話してくれました。」

「そういう事じゃなくて…。」

「これは、俺なりの『区切り』ってやつです。確かに、まだ胸がチクチクする事もありますけど、気分はすっかりしました。」

「良かったね…。」

笑顔で話す春人君を見て、これで彼は大丈夫だろうと確信した。

「それで、この前の続きなんですけど…。」

「…！」

ついに来た…。



「俺が、佳奈子の事に区切りを付けたかったのは、他に気になる人が出来たからなんです。」

「気になる人…って？」

「その人は、俺と同じ経験があつて…。」

「…。」

「こんな俺のどこがいいのかわからないんですけど、好意を持ってくれたみたいで…。」

「…。」

「初めは、からかわれているんだと、思っていたんですが…。そうじゃないらしくて…。」

「…。」

「その人は優しい人で…。その人が笑顔になると、俺は嬉しくなつて、その人が悲しそうな顔をすると、俺は心配でしよつがなくて…。」

「

「…。」

「つまり、何が言いたいかと言つと…。その人も、俺と同じ気持ちだといんですけど…。」

「…。」

彼はそこで、一呼吸おくと、大きく深呼吸した。

「俺は夏海さんが好きです！」

私の期待通りの言葉だった。

涙が零れてきた。

初めて、異性の前で涙を流してしまった。

この時は、どうしても、我慢出来なかった。

「佳奈ちゃんよりも？」

「勿論です！だから、俺の恋人になってくれませんか？」

「はい！喜んで！」

精一杯の笑顔で、返事をした。

「何か…、どこかの居酒屋みたいですね…。」

心底、ホッとしたような顔を見せた彼が、たまらなく愛しかった。

「本当に私なんかで良かったの？」

今日は、家の前まで送ってくれると言う春人君と並んで歩く私は、もう一度確認する。

「もー、何回、同じ事を聞くんですか！夏海さんがいいって、言ってるじゃないですか！」

「だって…、私の方が年上だし、背だって私の方が高いし…。」

「あつ、やっぱり、それを気にしていたんですか！」

「『やっぱり』って？」

「最初の頃、ヒールの高い靴だったのに、この前、遊園地に行った時から、ヒールがない靴に変わったから。今日もそうだし。」

「だって…。」

「ヒールの高い靴で、颯爽と歩く夏海さんの方が、絶対、格好いいですよ！」

「そう…かな？」

『格好いい』と言われても…。

私…、一応、女なんだけど…。

「今更、俺の身長が伸びたり、夏海さんが縮んだりする事はないですから。気にするだけ損ですよ！」

「年齢差は？」

「それこそ、気にするだけ無駄ですよ。たった四歳だけじゃないですか！六十歳、七十歳になれば、同じ年みたいなものですよ！」

「…！」

それって…。

ずっと一緒にいてくれるって事？

いやいや、何を先走っているんだ、私は…。

「夏海さんに、一つ聞いてもいいですか？」

「何？」

「俺なんかの、どこが良かったんですか？」

「うーん、難しい質問だなあ…。だって、一目惚れみたいなものだったから…。」

「はあー？一目惚れ？」

「そう！」

本当は、他にも色々あるけど、きっかけは間違いなく、最初に出会

った瞬間だったから…。

「ここで大丈夫だよ。私の家、あそこだから。」

家の近くまで来たところで、別れを告げようとする私。

「家の前まで、行きますよ。」

「うーん…、気持ちは嬉しいんだけど…、うちの家族に見つかるの色々厄介だから。」

「そうですねか…。」

少し肩を落とした春人君。

「あのね、家族に紹介したくないって事じゃなくてね…。会えば分かるんだけど、色々面倒臭いのよ、うちの家族…。」

お父さんとか、お母さんとか…。

お姉ちゃんもだけど。

「じゃあ、日を改めてご挨拶に伺います。」

「そんなに、かしこまらなくても…。それより…、ちょっとこっち来て…。」

辺りを伺いながら、電信柱の影に春人君を呼ぶ。

「何ですか？」

「…。」

そこで、彼の手を取り、思い切つて目を閉じる。

「あうっ、えー！」

「早く！誰か来ちゃうよ！」

躊躇していた春人君だったが、私の唇にそつと自分の唇を重ねる。

ほんの一瞬だけ…。

「…。」

目を開けると、顔を真っ赤にした春人君がいた。

「何か短くない？」

「いきなりは、難しですって！誰か来るかも知れないですし！」

「ケチ！」

「そういう問題じゃないですよ！」

テンパっている彼が、とても可愛く思えた。

いつの間に、こんなに好きになっちゃったんだろう？

あーあ、私の……………だったのになあ。

春人君と別れた後、そんな事を考えながら、家の玄関を開けると…。

「おかえり！遅かったね。」

風呂上がりの母に出くわす。

「うん…。ただいま…。」

母の顔がまともに見れない。

だから…、女子高生かよ、私は…。

「もしかして…、デート？」

「…！」

「うわっ！分かり易い反応なこと！」

「もー、うるさいー！」

私は、急いで自分の部屋に向かう。

恐らく、私の顔は真っ赤だろう。

だって、物凄く暑いから…。

外はまだまだ寒いのに…。

「もー、聞いて下さいよー、夏海さん!」

「どうしたのよ、一体。」

週が開けて月曜日。

久しぶりに、佳奈ちゃんに会う。

いつものように、社員食堂で話す私達。

「この前、彼氏と春人と三人で会ったんですけど。春人の奴、私の『黒歴史』ってやつを、洗いざらい彼氏に話しちゃったんですよ! 酷くないですか!」

「そんなに隠しておきたかった事なの?」

「まあ、そうでもないですけど…。でも、彼氏には隠しておきたかった事なんです!」

「彼氏は何て言ってるの?」

「『お前の新たな一面が見れた』って、喜んじゃって…。ことある



毎に、からかわれて…。もー、最悪です！」

「でも、春人君だって、本当に言っちゃまずい事は、言っていないでしょ？」

「そうですね…。やっぱり、夏海さんは春人の味方なんですよね…。女の友情って、好きな男の前では無力ですもんね…。」

「そんな大袈裟な…。」

「そう言えば、どうになりました？」

「な…に…が？」

「うわー、とぼけてるよ、この人！『長期戦』か『短期戦』かですよ…！」

「実は…、もう付き合ってる…、春人君と…。」

「はあー？夏海さん、春人に『好きだ』って、言ったんですか？」

「ううん、言われた…。春人君に…。」

私が言わせたようなもんだけど…。

「早いですね…。私が想像してたより、遥かに…。やっぱり、夏海さんの『攻撃力』って、半端ないんですね…。」

「…。」

「じゃあ、今夜、ゆっくりと聞かせてもらおうとしましょうか、二人のいきさつを！」

「えー！」

「私には、聞く権利があると思います！二人のキューピッドなんですから！」

「佳奈ちゃんの、『黒歴史』と引き換えなら…。」

「それは無理です！…、その代わりに、春人の『黒歴史』でどうですか？今後、色々役に立つと思います…。」

「うーん…、それで手を打とう！」

私に、春人君を巡り合わせてくれた佳奈ちゃん。

本当にありがとう！

これからも、仲良くしてね！

あれから一年… (最終話) (前書き)

今回が最終回です。

最終回を前に、登場人物の紹介をします。  
興味のない人は、本編へどうぞ。

『倉田夏海』

前作に続き、本編の主人公。

身長168センチのモデル系美人だが、彼氏いない歴〃年齢。(そんな奴いるわけがない、というツッコミはなしで。)

子供の頃は、姉に対して劣等感を抱いており、素直に自分を出す事が出来なかった。

成長するにつれ、本来の自分を出せるようになっていくが、長年の片思いの相手である冬樹には、素直になれないでいた。

そして、その想いに決着をつけた後は、本来の自分を出せるようになっていく。

大人になってからは、身長や年齢にコンプレックスがあり、恋愛方面には踏み出す事が出来ないうでいた。

十代や二十代前半のうちに経験するはずの事は、冬樹に対する想いの所為で経験する事が出来ず、恋愛経験は初心者に近い。

本来の性格は、明るく、快活な女性。

『松浦春人』

佳奈子曰く、「パツとしない奴」だが、真面目で心優しい青年。

身長163センチで、ごく普通の容姿だが、夏海の恋愛フィルター

を通すと、イケメンに見えるらしい。

ヒールを履いた夏海より、10センチ近く、背が低いが、特に気にはしていない。

ずっと片思いをしていた佳奈子に対する想いを、どうしたらいいのが悩んでいる時に夏海に出会う。

夏海の、必死のアプローチには早くから気付いており、困惑しつつ惹かれていくが、いい加減な気持ちで、その気持ちに応えていいものか悩む。

『松井佳奈子』

春人の幼なじみで、夏海の後輩。

背が低く、明るく、可愛らしい女性。

思っている事をハキハキ言うタイプだが、そういう女性が嫌いじゃない夏海に、可愛がられている。

佳奈子も、夏海を姉のように慕っている。

恋愛方面になると立場が逆転し、恋愛音痴の夏海の世話を何かと焼いている。

春人が、自分に告白してきた事を忘れてるわけではないが、彼が未だに自分の事を引きずっているとは、夢にも思っていない。

そんな彼女の態度は、夏海を苛立たせる事もあった。

ちなみに、身長は153センチ。

以上、主要キャラ三人の人物紹介でした。

では、本編をどうぞ。

あれから一年… (最終話)

長かった冬も終わり、初夏の陽気になった、この日。

結婚式の帰り道を、春人君と並んで歩く私。

春人君と付き合い始めてから、一年が経過していた。

「佳奈ちゃん、凄く綺麗だったね！」

「そうですね…。」

結婚式だから、ヒールの高い靴を履いて来た私。

春人君を見下ろす形になってしまったが、特に気にしてはいない。

「もしかして、まだ、胸がチクチクするの？」

「もう、しないですよ！少し感慨深いだけです。」

春人君の言葉が本音かどうか、私には分からない。

ただ、にっこり微笑んだ彼の表情は、信じるに値するものだった。

「私も、ウェディングドレス、着たいなあ…。」

そう言って、チラッと春人君を見たが…。

「夏海さんなら、凄く綺麗でしょうね！」

そういう事じゃなくて…。

『綺麗だろう』と言ってくれて、嬉しいけど…。

「私も、もうすぐ三十歳かあ…。」

「誕生日が夏だから、『夏海』なんでしたっけ？」

これは、少し遠回し過ぎたか？

「私、三十歳までに、結婚したかったんだけどなあ…。」

「へーえ、そうだったんですか。」

「コイツ、わざと言ってるのか？」

「あのね、春人君！」

「何ですか？」

「私は、ウェディングドレスを着たいの！」

「それは、さっきも聞きましたけど？」

「私は、もうすぐ三十歳になるんだけど、出来れば、三十歳までに

結婚したいの！」

「…?」

「こういう私の希望を聞いた春人君は、私に何か言う事があるんじゃないの?」

「もしかして…、『俺と結婚して下さい!』、…ですか?」

「その通り!良く出来ました!幸せにしてね!」

「もしかして、今のでプロポーズした事になっちゃったんですか?」

「そうだよ。だって、『結婚して下さい』って言ったじゃん、春人君。」

「確かに、言いましたけど…。それに、こういう事はよく考えた方が…。まだ、付き合って一年ぐらいだし…。」

「期間なんて関係ないよ!だって、私は春人君がいいんだもん!」

「そう言ってくれるのは、嬉しいですけど…。」

「春人君は、私じゃ不満なの!」

「そ、そんな事ないですよ!」

「この先、私より若くて、いい娘が現れるかも知れないもんね…。」

「だから、違うって言うてるじゃないですか!もー、分かりました、

結婚します、結婚して下さい！」

「何か、投げやりだなあ。」

「何なんですか、一体！今日はいつもと違いますよ、夏海さん！」

確かに、今日の私は変かも知れないが…。

幸せそうな佳奈ちゃんが、羨ましかったから…かな？

春人君にプロポーズされた、この日。

ついに、私にも春が来た！

私が、無理やりプロポーズさせたようなもんだけど！

私の赤い糸は、運命の人に繋がった！

「緊張するなあ…。」

今日は、春人君が倉田家にやって来た。

「だから、大丈夫だって！」



「そうは言っても…。」

緊張がピークの春人君だが、実は、私も少し緊張している。

春人君もそうだけど、本当に大丈夫か、うちの家族…。

変な事を言い出さないだろうか…。

「春人君を連れて来たよ！」

「いらっしやい、ようこそ！」

玄関を開けると、母が私達を出迎える。

そして、居間に入ると、私は固まってしまった…。

居間にいたのは、両親と祖父母。

ここまでは、問題ない。

そして、お姉ちゃんと冬樹、姪もいる。

まあ、この人達も一応、家族だけど…。

更に、冬樹のお父さん、秋姉ちゃんとその息子までいる。

彼等は違うだろ！

「夏海さんと結婚させて下さい!」

両親に向かい、春人君が頭を下げる。

心なしか、声が震えている。

そして、父の発した言葉は…。

「ダメです!」

「「えっ?」

父の言葉に、耳を疑った。

「ハイハイ、バカな事を言わないの、お父さん。」

固まったままの私達を余所に、笑顔の母。

どういう事?

「だってさあ、冬樹君の時もそうだったけど、大事に育てた娘達を、簡単に持って行っちゃおうとするんだぜ!ちょっとぐらい、意地悪したくなるんだよ!」

この親父は…。

「春人君が困ってるから、それぐらいにしておきなさい、お父さん

「でも、春人君は本当にいいの？夏海なんかで。」

『夏海なんか』って、どういう意味よ、お母さん！

「夏海さんがいいんです！」

春人君は言い切ってくれた。

また、涙が出そうになった…。

そして、案の定、宴会が始まる。

いつもの事だけど…。

春人君は、お父さんとおじさんに捕まっている。

今日は、冬樹も一緒に捕まっている。

「娘を持つ父親なんて、つまらんもんだよ。なあ、マサ。」

「ホントそうだよ。タケちゃんとはまだいいけど、秋代なんか、盆と正月しか顔を見せないんだから…。」

「父さん達には、可愛い孫がいるじゃん！」

「あのおな、冬樹君。そうやって余裕を持っていられるのは、今のうちだけだぞ！二十年もすれば、冬樹君だって、俺達の気持ちか痛いほど分かるはずだ！」

「子供は男の子に限るぞ、春人君！」

「ハハハ…。」

何の話をしているんだ、あの酔っ払い共は…。

「夏ちゃん！おめでとう！」

この懐かしい呼び方は、秋姉ちゃんだ。

「今日は、何で秋姉ちゃん達もいるの！」

「春ちゃんが、『絶対、来た方がいい』って言うから。それに、夏ちゃんの未来の旦那様を見てみたかったし。夏ちゃんは、私の妹みたいなものだから。」

お姉ちゃん…、また余計な事を…。

でも、何か納得いかない部分もあるが、秋姉ちゃんに会えたから、良しとするか。

秋姉ちゃんも、大きく捉えれば家族だし。

「この前はごめんね。バカな家族で…。」

今日は、私が春人君の家に挨拶しに行く日。

「そんな事ないですよ！賑やかな家族で、いいじゃないですか。」

「でも、うちのお父さんがバカな事を言って、春人君を困らせたし…。」

「うーん、それは別に気にしてないですけど…。俺は、春海さんが怖かったかなあ…。」

「お姉ちゃん？」

「『私の大事な妹を泣かせたら、どうなるか分かってる？』って、笑顔で言われたから…。目が笑ってなくて、怖かった…。」

「お姉ちゃん、ああ見えて、空手の有段者だからね…。旦那の方は、もっと凄いです…。」

「冬樹さんって…、夏海さんが好きだった幼なじみ…ですよね？」

「バレたか…。」

「やっぱり…。」

「でも、今は何とも思ってよ！今は、春人君が…。」

「分かっていますよ。別に疑ってるわけじゃないです。あと、秋代さ

んはいい人でした。優しくて綺麗な人っ！イテテテッ！」

「これからは、他の女の人は見なくていいの！」

「なにも、つねらなくても…。そういう意味じゃないのに…。」

「春人君は、私だけを見てればいいの！これからは、ずっと！」

「最近…、夏海さんの印象が変わってきたんですけど。最初の頃と比べて…。」

「今の私が、本来の私！最初は猫をかぶってたから、春人君の前では。」

「何か…、騙された気分なんですけど…。」

「今さら後悔しても遅いよ！だって、私は春人君が大好きなんだから！世界で一番！」

〈完〉

あれから一年… (最終話) (後書き)

最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。

今作も番外編がありますが、主役は前作『ハル、ナツ、アキ、フユ』の番外編と同様、あの人物です。

お読みいただければ幸いです。

後書きでは、前作から引き続き登場した人物の紹介をしたいと思います。

『立花冬樹』

夏海と同級生で、幼なじみ。夏海の姉である春海と結婚し、現在は娘が一人いる。

早くに母親を亡くしているが、姉が母親代わりをしてくれていた。倉田家の両親にも面倒を見てもらっていた事もある。

春海には、付き合い始めた頃から、尻にしかれている。空手はかなりの腕前で、イケメン。

かなりモテるが、春海以外に付き合い合った娘はいない。

大学生の頃、偶然、再会した夏海の想いには気付くが、冬樹自身が、夏海を好きだった事があるかどうかは不明。

『立花春海(旧姓 倉田春海)』

夏海の実姉で、冬樹の妻。

子供の頃は、男勝りで両親を心配させていたが、成長するにつれ、

美しい容姿の女性へと成長する。

夏海と同様に、モデル系美人。

身長は170センチ以下（自己申告）。

その行動は、万事においていい加減だが、いつも周りの人間が何とかしてくれる為、トラブルになる事は少ない。

いわゆる、動くと『残念』なタイプ。

夏海とは、冬樹をめぐってギクシャクした事もあったが、基本は妹想いで姉妹の仲は良い。

実は、三十を前にして、男っ気のない夏海を、本気で心配していた。

『佐藤秋代（旧姓 立花秋代）』

春海と同級生で親友。冬樹の実姉。

夏海の事も、妹同然に思っている。

子供の頃は、かなりのブロンコンで、倉田姉妹と、冬樹をめぐっての奇妙な四角関係だった事もある。

容姿端麗、家事万能で明るく優しい女性。

中学生の頃の冬樹が、誰の事が好きかを読み違えた事もあったが、周りの空気を読み、気を使う事が出来る女性。

現在は結婚しており、一児の母。

春海達と違い、遠くに住んでいるので、めったに顔を見せず、父親を嘆かせている。

ちなみに、現在の名字は、今、考えました…。

『倉田剛』

春海と夏海の実父。

冬樹の父親とは幼なじみで親友。

現在は、飲み友達。

自身の妻とも幼なじみで、彼女には頭が上がらない。



自身の両親（春海と夏海の祖父母）も健在で、比較的裕福な家庭と  
思われる。  
女系家族で、彼に男兄弟はいない。  
実父も婿養子。

出来れば、夏海には、ずっと家にいて欲しかったようだが…。

『倉田洋子』

春海と夏海の実母。

娘達が子供の頃は、春海が結婚出来るか心配しており、彼女達が大人になってからは、夏海が結婚出来るか心配していた。

『立花雅樹』

秋代と冬樹の実父で、春海の義父。

早くに妻を亡くしているが、再婚はしていない。

娘の秋代が、冬樹の母親代わりをしてくれた事に助けられていたが、子供達は二人共、家を出てしまい、現在は一人暮らしで淋しい思いをしている。

時々、顔を見せにくる孫娘（冬樹の娘）の成長を見守る事が唯一の  
生き甲斐。

出来れば、息子夫婦には同居して欲しいと思っているようだが…。

『立花佳代（故人）』

秋代と冬樹の実母。

子供達がまだ幼少の頃、亡くなっている。

『山下千絵（旧姓 齊藤千絵）』

夏海の親友。

既婚。

明るい性格で、思い立ったら即行動がモットーの、夏海達のムードメーカー。

夏海は、彼女の性格が姉の春海に似ていると思っっているようだが、春海よりは周りに気を使える。

ちなみに、彼女の現在の名字も、今、考えました…。

『高橋詩織（旧姓 広田詩織）』

千絵と同じく、夏海の親友。

結婚しており、最終話の時点では、二児の母。

大学生の時、冬樹の事が好きになってしまい、夏海との関係がこじれた事もある。

夏海と和解した後、新しい彼氏が出来、その彼氏が今の夫。

冬樹と出会う前は、人見知りな上に、引っ込み思案で、おとなしい娘だったが、恋をしてからは少しづつ明るくなっていった。

彼女の現在の名字も…、以下同文…。

以上で人物紹介は終わりです。

花嫁の父…再び (番外編) (前書き)

番外編は夏海の父親、倉田剛の目線です。

花嫁の父…再び（番外編）

「お父さん、お母さん、長い間、お世話になりました。」

結婚式当日の朝、娘の夏海が頭を下げる。

俺は、またしても涙腺が崩壊した。

今日は娘の結婚式だ。

俺達夫婦には、二人の娘がいる。

下の子の夏海は、小さい頃はおとなしく、姉や隣の姉弟のあとを付いて回る感じだった。

小学生の頃には、上の子と違い、おしとやかな少女に成長した。

そんな姉妹の違いに、妻の洋子は首を傾げていた。

「同じように育てはずなのに、どうして姉妹でこうも違うのかしら。でも、夏海なら、大人になればすぐに、いい旦那さんが見つかるわね。」

そんな夏海だが、中学生の頃は、親しい友人が少なく、俺は少し心配だった。

しかし、高校生になると、親しい友人も出来たようで、徐々に明るくなっていく。

確か、上の子の春海が、冬樹君と付き合い始めたのは高校生の頃だったはずだが、夏海には高校生になっても、男の気配が全くしない。

「夏海に恋人はいないのかしら？春海は何か知ってる？」

「さ、さあ…、知らない。…」

春海は何か隠している感じだったが…。

別に恋人なんていなくていいよ！

まだ、高校生なんだし。

俺はそう思っていた。

もしかして、夏海も冬樹君の事が好きなのでは？

そんな考えも、ちらりと浮かんだ。

「冬樹君は夏海と付き合ってると思ってた。」

妻の言葉に、

「冬樹君なら、春海でも夏海でもどっちでも嫁にくれてやるぞ。」  
俺が強がってみせた時、姉妹の反応が、少しおかしかった事が気になった。

それから年月が経ち、春海が冬樹君と結婚しても、相変わらず男の心配がしない夏海。

この娘は、恋人を作る気がないのか？

異性には、興味がないのか？

あらぬ心配をした事もあったが、それならそれで、ずっと家にいればいいと、俺は思っていた。

その後も夏海は、友人達が結婚していき、三十の声が聞こえ始めてきても、まるで焦りを見せない。

こういう状況になってくると、普通の女性は焦ってくるはずなんだが…。

さすがに、俺も少し心配になってきたが、妻の心配はもっと凄かった。

休日なのに、何処かへ出掛けるわけでもない夏海。

そんな夏海に妻は、

「あんだ、休日なのに一緒に出掛けるような人はいないの？」

と聞くが…。

「私だって、友達ぐらいはいるよ。」

と答える夏海。

母親が、何を心配しているのかすら、理解していない。

「そういう事じゃないの！恋人はいないのかって聞いているの！」

「いないよ。」

休日の度に、同じような会話が二人の間で交わされていた。

そんな夏海にも、ようやく彼氏が出来たらしいと、妻から聞かされたのは、今から一年半ぐらい前だった。

とある日曜日、弁当を持って出掛けようとする夏海に…。

「お前、日曜日なのに弁当を持って、何処へ行くんだ？」

と聞く俺。

「べ、別にいいじゃん…。」

と答える夏海。

嫌な予感がした…。

「今日、夏海は何処へ行ったんだ？」

妻に聞くと…、

「今日はデートだって！あの娘にも、ようやく彼氏が出来たみたい  
！」

嬉しそうな妻だったが、俺は面白くない。

夏海は、ずっとこの家にいると思ってたのに…。

それから一年が過ぎた頃…。

「お父さんと、お母さんに会って欲しい人がいるんだけど…。」

そう切り出した夏海。

俺は思わず、天を仰いだ。



ついに、来たか…。

そして、結婚式当日の朝、夏海に呼ばれる。

「お父さん達、ちょっとここに座って！お決まりの挨拶するから！」

この時点で、俺の涙腺は崩壊寸前だった。

俺の表情を見た夏海は、必死に笑いを堪えている。

クソー、こんなはずじゃないのに！

「お父さん、お母さん、長い間、お世話になりました。」

そして、またもや涙腺崩壊。

横目で妻を見ると、またしても泣き笑いの複雑な顔だった。

数年前に、見た光景だった…。

その日の夜、冬樹君や春海と一緒に家に戻って来ると…。

「お父さんてば、式の間中ずっと泣いてるんだもん！正直、ちょっと引いちゃったよ、私！」

数年前、夏海にも言われた言葉で、春海に責められてしまった。

だから、その言葉は既に、聞いた事があるんだよ！

「何とでも言え…。」

「拗ねちゃったよ、お父さん。」

「実はね、春海の結婚式の時も、夏海に同じ事を言われてるのよ、お父さん。」

それは、言わなくてもいいんじゃないか、母さん…。

「そついえば、お父さん達に報告があつたんだつた！今度、私達、冬樹のお父さんと同居する事にしたから。」

「「はあー？」「

重要な事をさりりと口にする春海に、俺達夫婦は開いた口が塞がらない。

「冬樹は、立花家の長男なんだし、そんなに驚く事じゃないでしょ？」

「マサばかり、ズルい…。」

「『ズルい』って、何がよ？」

「俺だって、孫と一緒に暮らしたい…。」

「冬樹のお父さんは、今、一人で住んでるんだから。お父さん達は、我慢なさいよ！すぐ隣なんだし。」

クソー、マサの奴…。

夏海達は、俺達と同居してくれないかなあ…。

やっぱり、娘を持つ父親なんて、ホントつまらん！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5678p/>

---

冬が終わり春が来た

2011年1月2日19時41分発行